あとがき

【作者について】

ギッシング（George Robert Gissing, 1857-1903）は、一八五七年一一月二二日（日曜日）、イングランド北部の都市リーズの南十六キロにある大聖堂の町、バラ戦争の古戦場として有名なウェイクフィールドで生まれた。彼の父親は町の中心街に店を構えていた薬剤師で、地方の植物を調査して出版した書物も何冊かあり、古典を中心とした文学や教養を志向する点において息子に大きな影響を与えた。一方、無教養で福音主義を妄信していた母親は愛情に欠け、息子を愛撫することもなかったので、ギッシングは嫌って避けていたようである。

ギッシングは十三歳の時に父親を肺充血で亡くした。それは一八七〇年の暮れで、彼が尊敬する先輩作家で父親が居間の壁に肖像画をかけていたディケンズの死の半年後だったので、文学を中心とする学問に秀でた教養人を目指していたギッシング少年にとって、父親とディケンズが心の中でメンターとして重なっていたことは想像にかたくない。ギッシングには四人の弟妹たちがいたが、まだ幼すぎて彼の知的な話し相手になれなかったため、彼の生活に孤独と不幸の影が射すようになった。それで、ギッシングはチェシャー州の寄宿学校に入れられることになり、そこで睡眠を五時間半に定めて猛勉強し、特に古代と現代の言語と文学に興味を覚え

た。十五歳になると、秀才の誉れが高かったギッシングは、オックスフォードかケンブリッジの学者になるだろうと将来を嘱望され、やがて奨学金を得て現在のマンチェスター大学の前身であるオーエンズ・カレッジに入学した。

マンチェスターで一人暮らしを始めたギッシングは、勉学中心の生活による孤独のせいで、十七歳の街の女、ネル（Mariamne Helen Harrison, 1858-88）を愛するようになった。オーエンズ・カレッジの最終学年を迎えた一八七六年二月、ギッシングは淋病に感染したにもかかわらず、ネルを社会の犠牲者と考え、お針子として更正させるために大学のロッカー室で友人の金、書籍、衣類を盗んでミシンを買い与えたりしたが、彼女は飲酒癖があって金のために売春をやめなかった。最終的に、ギッシングは三月末に張り込み中の刑事に逮捕され、有罪の判決を受けて放校処分となっただけでなく、一ヶ月の監禁と重労働を言い渡され、合格していたロンドン大学入学の許可も取り消されてしまった。この事件は、「堕ちた女」のために学者としての将来を棒にふることになったギッシングのトラウマとなり、自分を社会から追放されたエグザイルと考えた彼は、自己否定的な言動と悲観的な人生観に支配されるようになった。

釈放後、ギッシングはウェイクフィールドに帰郷したが、犯罪で後ろ指を差された「黒い羊」は新天地アメリカへという当時の慣習に従い、一八七六年九月、リヴァプール港からボストンへ出立した。ギッシングのアメリカ生活は一年あまり続いたが、同時に彼の文学的才能を発揮させることにもなった。ボストンでは美術館で見た絵画についての記事を定期刊行物に書いた

り、シカゴに移って餓死の恐怖におびえた時には、ホテルの談話室に座って二日で短篇小説を書いたりした。この最初の作品「親の因果が子に報う」(“The Sins of the Fathers”)は十八ドルで売れ、一八七七年三月一〇日の新聞『シカゴ・トリビューン』に掲載された。この作品の冒頭部分にはギッシングの初期作品群に特有の労働者階級の貧困に関する自然主義的な描写がすでに見られる。それから、ギッシングは地元の雑誌に短篇小説を売りながら生計を立てていたが、ミシガン州のトロイでは数日間をピーナッツだけで食いつなぐほど金欠病に苦しんだ。そして、旅の写真屋のアシスタントとして数ヶ月ほどニューイングランドを放浪したのち、同年九月、万策つきたギッシングはイングランドへ帰国することになる。

ボストンから船に乗ったギッシングがリヴァプール港に着いたのは一八七七年一〇月三日で、六週間ほど故郷のウェイクフィールドに滞在したが、直ちに作家として身を立てるべくロンドンへ上京し、その後すぐ呼び寄せたネルと同棲を始めた。それは強烈な孤独感と抑圧された性欲に耐えられなかったからである。一〇月二七日、彼はリージェンツ・パーク東のセント・ジェイムズ教会でネルと正式に結婚したが、アルコール中毒の彼女が隣近所で起こす頻繁なトラブルや反抗的な言動のせいで、彼の生活は生き地獄さながらであった。

そうした中で、ギッシングが家庭教師や不定期な仕事をしながら仕上げた処女作『暁の労働者たち』(*Workers in the Dawn*, 1880)は、一八七三年から始まるイギリスの慢性的な経済不況による労働者たちの貧困が原因の様々な社会問題に対する抗議の書であったが、出版拒否の憂き

目にあっただけで、結局は父親の遺産を使って自費出版せざるを得なかった。一八八二年になると、ギッシングはもはやネルとの生活に我慢できなくなり、定期的に少しの手当を与えて別居するようになった。その後もギッシングは短篇や中篇を書いていたが、出版社からは買い取りを拒まれ続けた。だが、『無階級の人々』(*The Unclassed*, 1884)はチャップマン・アンド・ホール社の原稿閲読者で、夏目漱石が大きな影響を受けたジョージ・メレディスに高く評価された。「芸術家は、自分自身の苦しみが極限にある時でさえ、それを作品の素材にできなければならない」(第二五章)と述べる売れない小説家で、容姿も作者によく似た主人公のオズモンド・ウェイマークは、ギッシングの一連の代表作に登場する貧乏な若い知識人たちの露払いとなっている。

これら初期の作品群で、ギッシングは都市の中心部でゲットー化されたようなスラム街の貧困と悲惨な生活を同情的に描いているが、同時に貧民たちに対しては非常に反感的な描写が見られる。それは自堕落な労働者たちが貧民街で身についた生活習慣をどうしても改めようとしなかったためである。彼らの悪癖が直ることはないという確信は、人間の意志や努力では変更できないとするギッシングの人生観と合致している。その結果、ギッシングは自分の作品で真理を追究すべきテーマは下層階級の人間ではなく、商業社会における生存競争で必要とされる実践的な知識のない、自分とよく似た教養のある知的な若者の苦悩であることを悟るようになった。その証拠に、オーエンズ・カレッジ時代からの学友であるモーリー・ロバーツに宛て

た一八九五年二月一〇日付けの手紙では、「私の作品でもっとも特徴的な、もっとも重要な部分は、私たちの時代に特有の十分な教育を受けて育ちもいい、しかし金がない階級の若者たちを扱っている部分です」と語っている。

一八八〇年代後半になると、ギッシングは貧困やスラム街といった社会問題の路線から一時的にそれ、若者たちが都会の貧困生活から逃れて結婚によって上の階級に入ろうとする作品を書き始めた。初めて貴族的な田園を背景として書かれた『イザベル・クラレンドン』(*Isabel Clarendon*, 1886)は、ギッシングの作品に典型的なタイプの自己否定的で内省的な主人公、バーナード・キングコートに関する性格小説である。同様に社会小説から離れようとして一八八五年に完成していた『人生の夜明け』(*A Life's Morning*, 1888)は、ギッシングを世に出してくれたメレディスの『リチャード・フェヴェレルの試練』(*The Ordeal of Richard Feverel*, 1859)の影響が大きい作品である。教育を受けたために生まれ育った環境から離れたものの、貧乏でどこにも所属できずにエグザイルの生活を余儀なくされるギッシングの主人公たちの女性版、エミリ・フッドは道徳的・精神的問題においてジョージ・エリオットを想起させるような性格分析がなされている。

下層生活の場面を切り捨てないように忠告したメレディスに従って、ギッシングは『民衆』(*Demos*, 1886)で貧民街のテーマに戻ったが、労働者たちの目標や能力への期待を裏切られたことで、この小説では彼らに対する共感が消えてしまった。「個人としての貧乏人に対しては

所持金のすべてを与えるが、連中が階級として立ち向かってくる時は、情け容赦しないぞ」（第二九章）という斜陽階級のヒューバート・エルドンの言葉は、労働者の個人と集団に対するギッシングの両価感情を示している。次の作品『サーザ』(*Thyrza*, 1887) では、ウォルター・エグレモントという若い裕福な理想主義者が労働者階級の知的解放の手段として講演によって労働者たちを教化しようとするものの、その試み自体が辛辣に批判されている。この小説でも、ギッシングの初期小説群と同様に、階級間の境界を越えた愛は破滅する運命にあり、社会のそれぞれの階層は互いに交わらず、自分の階級の流儀に従うべきだということが再認識される。

一八八八年二月の後半、ギッシングはイギリス海峡に臨む行楽地イーストボーンで気分転換をしていたが、その月の二九日の夕方にネルの死を伝える電報をもらい、ロンドンのランベス区にあった彼女の下宿へ向かった。翌月の一日に妻の遺体が置かれた汚い下宿を見て、ロンドンでの青春時代に体験した社会的な不公平に対する激しい怒りがよみがえったギッシングは、その後すぐ正視に耐えないほど悲惨な貧困の場面を活写した『ネザー・ワールド』(*The Nether World*, 1889) を完成させた。

悪妻を養う義務から解放されたギッシングは、この小説の版権料百五十ポンドを旅費にあて、一八八八年九月二六日、長年の夢であった大陸旅行に出かけた。汽車でマルセイユまで行き、そこから船でナポリに渡り、ローマ、フィレンツェ、ヴェニスなどを五ヶ月かけて旅した。この旅行が特筆に値するのは、それを境にギッシングの関心の対象と作風が大きく変化し、一線

を引いたように彼の作家人生を二つの時期に区別できることである。ギッシングは、それまでの社会批判の視座としての労働者階級と貧困に関する自然主義的な描写をやめ、自分が帰属意識を持つ中産階級の人々とそのマインドセットの探求を志向するようになったのである。具体的には、中産階級で教育を受けた繊細な性格で精神的に脆弱な若者が、ヴィクトリア朝後期の時代精神と社会風潮になじめずに犠牲となる様子を活写し、女性の社会的束縛、現代文明の卑俗性、利己的な競争心、文学の商業化、自己欺瞞的な道徳観といったテーマを論じた。

その結果、小説家としてのギッシングの素晴らしい作品が陸続と誕生した。大陸旅行中のヴェニスで着想を得てから帰国して書いた小説『因襲にとらわれない人々』(*The Emancipated*, 1890) で、ギッシングは教育を受けて自由を謳歌する聡明な美しい女性が嘘つきな洒落者との結婚生活に幻滅する姿を描き、十九世紀後半に最高潮に達する「ウーマン・クエスチョン」を提起している。この小説が完成した一八八九年一一月、ギッシングは二度目の地中海旅行に出かけたが、最後のナポリ滞在中に四年後の彼の死因となる肺病の兆候が現われ始めた。翌九〇年三月の初旬にロンドンに戻ったギッシングは、『三文文士』(*New Grub Street*, 1891) の執筆に取りかかったが、実際には仕事がなかなか進まなかった。その主な原因は、ドイツ人の友人エドゥアルト・ベルツ宛ての九月二四日付けの手紙で、「教養があっても貧乏な男は自分と同じような女性が貧困を共にしてくれるなどと期待すべきでない」と語っているように、そばに女性がいないことによる孤独感であった。

『三文文士』の校正刷りを読んでいた九月二九日、孤独に耐えられなくなったギッシングは、オックスフォード・ストリートのミュージック・ホールで出会った労働者階級の二三歳の女性イーディス(Edith Underwood, 1867-1917)に声をかけた。翌九一年二月二五日、ギッシングは彼女とリージェンツ・パーク北東部のセント・パンクラスの戸籍登録所で結婚したが、その場にギッシング家の者は誰も同席していなかった。最初の妻が売春とアルコール中毒で見るも無残な最期を遂げたあとも、ギッシングがイーディスと同じような結婚をしたのは、中産階級の知的な女性とは結婚できないという悲観的な自己否定の結果であると同時に、性欲を抑制できないために女性の教養の欠如を無視せざるを得なかった結果だと言ってよい。しかし、精神的および肉体的に満たされない気持ちから労働者階級の女性と関係を持って陥ることになる流離落魄の境遇にもかかわらず、彼の教養に対する深い傾倒は死ぬまで揺らぐことがなかった。

このような作者自身の体験が色濃く反映され、文筆生活の苦難を描いた『三文文士』は、出版当時の書評家の多くが好意的に評価し、現代の批評家たちからもギッシングの最高傑作と見なされている。文学もまた当時の商業主義に支配されており、芸術至上主義を唱える主人公エドウィン・リアドンは破滅する運命にある。この小説では、商売としての文学や俗受けを狙ったジャーナリズムの読者に迎合することなく、貧困にあえぎながらも世に認められようと苦闘する作家の姿がリアルに描かれ、そうした時代の影響力が人間関係をいかに歪めているかも明らかにされている。

ギッシングはイーディスと結婚してから、『三文文士』で得た百五十ポンドをもとにロンドンの喧騒を逃れてイングランド南西部デヴォン州の田舎町エクセターで新生活を始め、その年の一二月に長男ウォルターが生まれた。彼が結婚後の半年で仕上げた『流謫の地に生まれて』(*Born in Exile*, 1892) の舞台はエクセターである。作者同様に父親が薬剤師の資格を持ち、学問的なハードワークで出世しようとする主人公、ゴドウィン・ピークは自分を環境の犠牲者と思って現実逃避し、自分の道徳観念の欠落を無産階級だった祖先からの遺伝のせいにする点で、ギッシング作品の底流をなす自然主義の代表的人物だと言える。三巻本形式のヴィクトリア朝の長篇小説の伝統を破って、ギッシングが初めて一巻本形式で書いた中篇小説『デンジル・クウォリア』(*Denzil Quarrier*, 1892) は、同名の主人公が過激化した政治思想のために政府転覆の危険な陰謀に巻き込まれる政治小説であるが、その妻の心理描写を通して女性の権利に関する作者の好意的な見解も示されている。

次の作品『余計者の女たち』(*The Odd Women*, 1893) は女性の権利がメインテーマとなっており、フェミニズムの古典として今なおフェミニスト批評家によって論じられることが少なくない。この小説の出版後、「どんな社会平和も女性が男性と同様に知的な訓練を受けないかぎりは成就されない」と言ったギッシングが、従来の良妻賢母型の「家庭の天使」に代わる「新しい女」のヒロインを描き、教育の機会、職業の選択、財産の相続における男女不平等の実態に読者の目を向けた。ただし、彼が共感を示すのは、あくまで教養としての教育を受けて洗練

された感受性を持つ女性たちであった。

この頃、『三文文士』でも述べられているように、一般大衆は短い形式の読み物を要求し始めており、三巻本形式の小説は文学市場から消え去ろうとしていた。一八九四年四月に完成した『女王即位五十年祭の年に』(*In the Year of Jubilee*, 1894)は、ギッシングにとって最後の三巻本形式の小説であった。これは結婚問題と産業社会における価値観の腐敗についての物語で、大量生産による商業主義や卑俗な広告、大衆教育によって新たな力を得た労働者階級が社会全体に及ぼす影響に対するギッシングの嫌悪感が見られる。

ギッシングは、一八九四年から九八年にかけて、いつもの長篇小説とテーマから離れて四つの中篇小説、すなわち悲喜劇的な恋愛と自己犠牲の物語『イヴの身代金』(*Eve's Ransom*, 1895)、ギリシャ旅行を終えた作者の古典を中心とした教養への傾倒が十八歳の若者を通して示される『埋火』(*Sleeping Fires*, 1895)、成金の義理の娘が上の階級の礼儀作法を学ぼうとして失敗する『下宿人』(*The Paying Guest*, 1895)、訪問販売をしながら他人の噂話を楽しむ男と短気で元気いっぱいの若い女性がロンドンを縦横に歩きまわる『都会のセールスマン』(*The Town Traveller*, 1898)を書いた。これらは出版社に依頼されて金稼ぎのために書かれた作品だが、遺伝と環境の因果律の影響下にある人間を赤裸々に描出する自然主義の作家と思われていたギッシングは、ここでコントラストの技巧によって読者が悲劇的あるいは喜劇的な状況を予見できるようなアイロニーの隠れた才能を示している。これらの小説は出版社によって戦略的

に市場に出され、売れ行きも悪くなかった。ギッシングのキャリアの中期において、長篇小説の売れ行きは相変わらず芳しくなかったが、中篇小説と短篇小説の方は比較的高値で出版社に買い取られ、結構な儲けとなっていた。

ギッシングの二番目の妻、イーディスは最初の妻ネルと同じように無知で、怒りやすく、凶暴な女、つまり彼が労働者階級のほとんどの女に見出した否定的な性質をすべて持ち合わせていた。そうした妻との結婚生活が厄介な状況の中で書いた『渦』(*The Whirlpool*, 1897) において、ギッシングは未知の分野として有閑階級に所属する社交界の人々を扱った。そして、女性解放への要求が高まり、男性の役割がますます不明確になっていた時代における結婚の問題に焦点を当てている。イーディスとの間には二人の息子が生まれていたが、彼女は結婚して数年後に精神異常の兆候を示し始めていた。最初の妻ネルの時と同じように、ギッシングは短気を起こして家庭を混乱させるイーディスと別居し、やがて妻が保護されて精神病院に収容されたことを知ることになる。

一八九七年九月、ギッシングは三度目のイタリア旅行に出発し、それが彼とイーディスにとって今生の別れとなった。この旅行によってギッシングはノンフィクションの分野に進出することになる。一つは彼が子供時代から愛読していた先輩作家についての批評的研究『チャールズ・ディケンズ論』(*Charles Dickens: A Critical Study*, 1898)、もう一つは南イタリアの日常生活を絵画的に描写した周遊記『イオニア海のほとり』(*By the Ionian Sea*, 1901) である。

一八九八年四月中旬にイギリスへ戻ったギッシングは、イングランド南東部のサリー州にある市場町、ドーキングに家を借りて一人暮らしをしながら執筆を再開した。父親と同じ肺の病気の悪化による健康の不安とは逆に、作家としてのギッシングの晩年に関しては、金銭的な不安が薄らいでいた。折しも、その年の六月に、ガブリエル・フルリ(Gabrielle Marie Edith Fleury, 1868-1954)というマルセイユ港の税関所長の娘から、『三文文士』の翻訳許可を求める手紙が届いた。ギッシングより十歳以上も若かったフランス人の彼女は、流暢な英語に加えてドイツ語とイタリア語にも通じ、彼が今まで結婚はおろか交際すら諦めていた中産階級の洗練された知的な女性であった。翌九九年の春、彼は離婚も正式の結婚も約束できないまま、彼女とその母親とともにパリで暮らし始めることになる。しかし、一九〇二年になると、弱った肺の養生のために温暖な気候の地、スペインとの国境に近いフランス南西端の漁港町、サン・ジャン・ド・リューズに転地した。

最後の作品群としては、ロシア文学に通暁していたギッシングが十八世紀のロシアで兵役を拒否した「霊の戦士」と呼ばれるドゥホボル教徒の平和主義的な信念をイギリス帝国主義に対する解毒剤として示した『命の冠』(*The Crown of Life*, 1901)、進化論を政治問題や社会問題に適用することを攻撃した喜劇的な作品『我らが大風呂敷の友』(*Our Friend the Charlatan*, 1901)、架空の人物に託して胸に浮かぶ様々な思いを春夏秋冬に分けて書いた回想録のエッセイ集『ヘンリー・ライクロフトの私記』(*The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903)がある。このエッセ

イ集はイギリスで人気を博しただけでなく、鴨長明の『方丈記』（一二一二）や吉田兼好の『徒然草』（一三三一）のように名利の巷を離れ、もののあわれ、幽玄、わび・さびの伝統を持つ日本人の心の琴線に触れる随筆として、日本でも昔から愛読されている。

一九〇三年の夏、ギッシングは暑気を避けるために海岸から離れたピレネー山麓のサン・ジャン・ピェ・ド・ポールに引っ越し、最後は北隣の村イスプールでガブリエルと一緒に暮らしていたが、すでに慢性の肺気腫で弱っていた肺の病気（直接の死因は心筋炎）で、肺充血で死んだ父親の三三回忌の日と同じ一二月二八日（月曜日）の午後一時一五分に息を引き取った。ギッシングはサン・ジャン・ド・リューズにあるイギリス人の共同墓地に埋葬されている。

ギッシングの死後に出版されたものとしては、ユスティニアヌス帝の治世中の六世紀イタリアを舞台にした彼の唯一の（未完の）歴史小説『ヴェラニルダ』(*Veranilda*, 1904) と、社会階級を落として雑貨屋になる主人公の諦めの境地が、恋愛、芸術、商業といったギッシングの常用するテーマと絡めて、軽いユーモラスな筆致で描かれる『ウィル・ウォーバートン』(*Will Warburton*, 1905) がある。

ギッシングは生涯に二二冊の長篇・中篇小説に加えて、随筆集、旅行記、批評書を著しただけでなく、生活費を稼ぐために百以上もの短篇小説を書いているが、短篇小説のほとんどは『人間がらくた文庫』(*Human Odds and Ends*, 1898)、『蜘妹の巣の家』(*The House of Cobwebs*, 1906)、『境遇の犠牲者』(*A Victim of Circumstances*, 1927)、『小話小品集』(*Stories and Sketches*, 1938) に

まとめられている。

＊　＊　＊　＊　＊

より詳しいギッシングの生涯と作品の解説については、訳者が編集した以下の二冊の研究書（絶版）がＰＤＦ版として一般公開されているので、関心のある読者諸氏に利用していただければ幸いである。

『ギッシングの世界：全体像の解明をめざして――没後一〇〇年記念』（英宝社、二〇〇三年一二月）http://victorian-studies.net/gissing-no-sekai.html

『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化――生誕百五十年記念』（溪水社、二〇〇七年一一月）http://victorian-studies.net/gg-150.html